

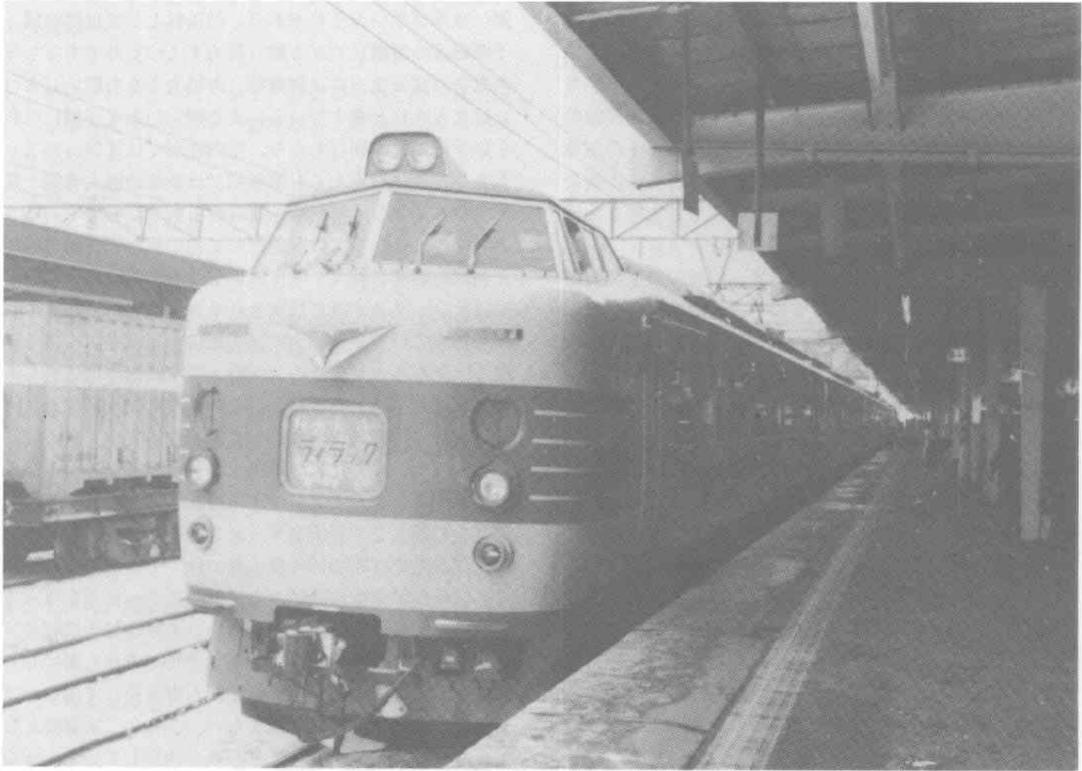
かぐらおか

第 26 号

昭和56年1月1日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は山田守英学長)



旭川駅

内 容

図書館長就任にあたって……………石井 兼央… 2	英会話学習教材の訪問販売に御注意! …………… 7
雑感—解剖体について—……………小野 一幸… 3	スポーツ大会…………… 7
信頼の構図……………黒田 一秀… 4	弓道部・卓球部主管終える…………… 7
昭和55年度通学方法・居住状況調査結果一覧………… 5	弓道場の建設について…………… 7
研究室紹介……………高杉 佑… 6	解剖体追悼法要…………… 8
新任教官紹介…………… 6	課外活動短信…………… 8
Japan and I……………A. T. Grenville… 6	窓 外……………笹森 秀雄… 8



図書館長就任にあたって

石井 兼 央

今迄は利用者の1人として図書館をみていたのだが、今度はからずも初代図書館長小野寺教授の後任として図書館長の役目を仰せつかることになり改めて本学図書館の役割とあり方を考えさせられている。「かぐらおか」編集部から図書館長就任の辞を書くようにとのお話があったが、何分就任早々のことであり私自身まだ図書館の業務内容を詳細に理解していないので抱負などをのべる資格はないと思う。しかし折角の御依頼なのでこの機会に学内の皆様の本学図書館についての御理解を頂き今後の御協力をお願いしたいと思ひ拙文を弄することにした。本学図書館は小野寺教授が開学以来、開設の準備、整備と7年の長きにわたって大変な御苦勞を重ねられてこられた。学内の協力態勢、図書館スタッフの努力をえられて現在のように立派な附属図書館に発展したものである。小野寺教授には心から敬意を表したい。開学当初の図書室時代、図書館の新築など諸事万端の準備や整備、昭和53年度の大学院設置にあたって専門図書30,000冊、学術専門雑誌300種以上を備える条件を満たすことなどでの御努力は大変なことであつたと思う。図書館には現在、洋雑誌791点、和雑誌378点、蔵書数55,000冊があり、英文の学術雑誌数では北海道の他大学に比してもひけをとらないし、一般教育用図書、雑誌数も新設の医科大学としてはもっとも多立派な大学図書館となっている。

教育、研究、診療を使命とする医科大学の機能にとって図書館の存在は基本的な支柱の1つであることはいうまでもないことである。日進月歩の学術情報、資料をそろえ十分に利用して頂ける態勢を整えることが図書館の使命であろう。そのためにはできるだけ必要と思われる学術雑誌、単行本をそなえることが望ましいし、利用者へのサービス向上を図らねばならない。ことに複数の大学があり図書館の相互利用が容易である大都市圏内とは多少異なる、本学の地理的条件からのハンディキャップを考えると、図書館機能の整備拡充はさらに望まれることであろうと思うしそのように微力をつくしたい。

図書館が現在行っている、あるいは計画していることや図書館の運営についての2、3の問題をのべ御批判、御意見を頂きたいと思う。第1の問題として現在購入している学術雑誌の種類のみ直しを近々行う必要があるだろうと思っている。購入雑誌数が増加すると継続的な図書購入費の増額が必要である。従来は新設医大として予算的にややゆとりがあつたし円高という世界経済事情からも新規雑誌の購入もあまり無理ではなかった。しか

し昨今の国家財政方針、物価上昇から洋雑誌、単行本の値上がり予想されるし図書購入予算も今迄のように順調には伸びないおそれがある。勿論私としては図書購入予算財源の増額にできる限り努力するつもりであるし学内教官の諸先生方には御理解、御協力方をお願いしなければならないと考えている。また開学以来7年間には新しい学術雑誌の刊行もあり、学内体制がほぼ整ったこともあり、この観点からも来年度には新規の購入希望、変更希望も加味して継続購入雑誌のみ直しが必要であろうと考えている。第2の問題として他の大学図書館との相互利用を迅速に行うシステムの強化がある。現在図書館にはトレックスが既に設置されており学内外からの利用も増えているが、他大学図書館のトレックスによる迅速な文献複写が可能なので学外への文献複写申込をも大いに利用してほしいと思う。このような相互利用システムは今後の図書館機能にとって重要性を増すであろう。このシステムの強化には他の大学図書館との関係が必要であるが大勢としてトレックス設置図書館が増えている。第3の問題として利用者サービス向上への努力である。現在図書館では昭和53年度よりのコンテンツシートサービス、昭和54年度より始めた文献調査サービスを行っている。また電話回線を使用しての日本科学技術情報センターオンライン情報検索によるサービス業務も開始している。いずれも備付の申込書に記入申込をして頂ければよいので気軽に利用して頂きたい。さらに二次資料として *Excerpta Medica* の購入が既に決定している。学術情報の迅速な入手、文献調査、文献複写のシステム化が以上のように行われていることは御承知でない方もいらっしゃると思われるので御紹介しておく次第。直接的な窓口サービスについては開館時間の延長についても研究してみたい。閉館時間延長には2、3の障害があるが利用者の要望が多ければ行いたいものである。

以上まともなくのべたが利用者あつての図書館なので利用者の御要望、御苦言があればどしどし申し立てほしい。最後に学生諸君に一言、自己学習に大いに図書館を利用してほしい。図書館は諸君に利用して頂くことも使命の1つであると考えている。

(附属図書館長、内科学第二講座 教授)



雑 感 —解剖体について—

小 野 一 幸

学生執行委員会より教務委員会宛の「1. 近年実習用の御遺体が減少しつつあり、また来年度は学生数が20名増えます。来年度の解剖実習条件に何らかの変更があるかをお聞きしたい。以下略」と言う文書が私の手元にきました。「医学生だから解剖実習をするのは当然であるから、御遺体が提供されるのは当然である」と考える学生は現在1人もいないと思います。医学生が解剖実習をすることはあたりまえですが遺体の提供は本人の意志と遺族のご理解とご協力によるものであります。病人が医科大学附属病院を訪れる様に遺体が自然に大学に集まるわけではありません。この際、解剖体についての理解を少しでも、深めていただきたく筆をとりました。

医学教育に欠かせない解剖実習には解剖体が必要な事は言うまでもありません。本学では、学長を委員長として両副学長と解剖の教授を含む教授4名、計7名からなる解剖体収集委員会で解剖体を如何にして収集するかが検討されております。明年度から解剖実習を行う学生が120名になります。従って今までより5体多い30体以上の解剖体を年間確保しなければなりません。これは極めて困難な仕事ではありますが現在懸命な努力を続けております。本年度は特に、山田学長や解剖体収集委員の先生方が公共団体関係当局や個人病院等に解剖体収集のためのPR活動を致しました。

文部省の教育基準によりますと「医学生2人に1体以上、歯学生4人に1体以上を解剖する」と定められております。しかしながら、各大学とも必要数を確保する事が困難な状況にありますので文部省の基準で実習する事は殆ど不可能であります。医学生6人または8人で1体を解剖している大学が多いものと思われまます。本学では本年度も4人で1体を解剖する事が出来ました。これは仲西前教授のご努力と関係者の皆様のご協力があったからこそ好条件で解剖実習が行い得たものと思ひます。

明年度はどうか現状維持で解剖実習が出来る見込です。遺体の提供は変動が極めて大きく、かつ予測が全くつきません。解剖体が少ない時の為に多く収集出来た解剖体を(そういう事はめったにありませんが)ストックしようとしても、そう都合良きはゆきません。解剖体の収集は遺族から遺体の提供、つまり献体されなければ出来ませんし、献体は遺族の皆様全員の同意が必要なのであります。遺体は遺族からお預かりしているものですから、解剖実習後、遺骨を遺族のご希望に沿って速やかに返納しなければなりません。正常解剖用の遺体は防衛

処置をし、実習が始まるまで保存しなければなりませんし、解剖実習は少なくとも3ヶ月以上かかります。また実習時期が定まっていることをも考慮致しますと、遺体を大学で約1年半は預かることになります。長い間遺体を預からなければならない事が献体に同意して頂けない理由のひとつ

本学において、現在までに収集されました解剖体の約50パーセントは、旭川市や道北の病院の先生方のご理解とご協力によったものであります。約18パーセントは献体の会である、白菊会旭川医科大学支部(合田支部長)の会員の方達であります。この支部は昭和50年より本学にご協力頂いており、昨年11月25日現在で生存会員248名、物故会員35名、申請中5名になっております。本人の自由意志と家族の同意があつてはじめてこの会に入れます。

「献体」という言葉は未だ国語辞典にとりあげられていません。その意味は「医学の基礎に必要な解剖実習に無償で遺体を提供する事」であります。米国、カナダ、英国、西ドイツ等では医科系大学等に対する国民からの献体が慣習化し、更に献体登録を適切に行う為の法律が制定されております。我国では、ようやく「献体登録の封制化への促進について」の勧告書が政府に提出されました。外国に例がある様に、理想としては解剖体の確保は、我国でも国家的事業にすべきだと私は思っております。

学生諸君は「医学生はなぜ献体の会により多く入らないのですか」と言う声を耳にした事がありますか。解剖体収集のために道北をキャンペーンした時、「医学生の入学の条件として、本人または親の献体登録を義務づけたら如何がですか」と言う厳しい発言をされる方もおりました。学生諸君はこれにどう答えてくれるでしょうか。善意あふれる多くの人達のご理解とご協力によって解剖実習が出来るのです。学生諸君は、これらの事情を十分に踏まえて、信頼される良い医師になるよう勉学に勤しんでもらいたいものです。

最後に、医学の教育研究のために献体下さいました方々のご冥福をお祈り申し上げるとともに、献体にご理解とご協力を賜りました遺族の方々に限りない感謝と敬意を表します。

(解剖学第一講座 教授)



信 頼 の 構 図

黒 田 一 秀

今われらは鏡をもて見るごとく見るところ靡なり — コリント前書 13:12

日本医事新報11月22日号に日本医師会長の病床からの特別寄稿が載っている。「毎日、新聞をにぎわしている医療荒廃の問題は、寝ていて一番気になる問題であり、必ずそこから読むことにしている」と書いておられる。武見会長でなくとも、医学医療に関係しているものにとって、近頃の報道には当惑するばかりである。同じ頃朝日新聞で信頼の原則と題する「今日の問題」欄をみた。某簡裁判事が罷免訴追を免れるため町長選に立候補したという安川事件で、国会の弾劾裁判所小委員会が、この種事件の再発防止のため弾劾法改正案を議員提案すること、富士見産婦人科病院の件で、医師たちについて捜査しても物証を得ることは非常にむずかしいことを述べ、そもそも裁判官にしる医者にしろ、まさか悪事を働くはずはないという信頼を前提にしている。世の中の制度は多かれ少かれ当事者に対する「信頼の原則」の上に成り立つ、とくに上記二者に対する法制にその色彩が濃い、「社会の柱であるこの原則はしっかり守っていきたい」と結んであった。大へん穏健に書かれていて少々安堵したのである。

医者に対する何らかのチェック・システムが必要との意見はますます増えてきているし、医師のなかにもこの声がある。国立病院医療センター産婦人科医長我妻氏も今までの密室医療のままでは、医学生に倫理教育をする位では高水準を保てない、具体的な評価システムが欲しいと述べている。ハワイ大学医学部臨床助教授のシゲオ・ナトリ医師の日本新聞紙上での指摘でも同じ意見のようだ。

ところで、日本の言論界も医療界も、わが国の制度は医師への全面的信頼にもとづいているし、米国の制度は医師への不信を基盤にして成立していると単純に決めこんですぎるように思われる。両者ともそれなりの歴史的経緯を持っていることを反省した上での議論がほしいと思う。いったい信頼とか不信とかは何を対象にしているのか。人間が対象なのであるか。人間関係の基礎は倫理という言葉であらわされ、人間性の尊重などという。人間性をとらえることは、この頃のはやりではあるが、人間は理性的であるかと思えば、動物的でもある。同種の動物では殺し合いをしないそうであるが、人間は武器を作って人殺しをする。人間性というけれど実に矛盾した内容のもので、時代によっても対極的な使われかたをした。人間(性)は信頼とか不信とかの対象ではないと思う。

医学医療は、この人間をこよなく愛するこの人間についてのわざであり、バビロン、エジプト、ギリシャ、ローマの昔から、あまたの星霜を経て現代西洋医学に到達した。科学としての医学が現在私たちの最大の関心事であるが、これは19世紀になってからのものである。この間に色々な水準の医療技術が行われ、携わる医療人も様様であり、種々の不都合も経験されているのである。現代化が進みテクノロジーの世の中になって人間疎外化は西洋も日本も同じであるが、西欧世界にはもう一つ精神世界の伝統がある。西洋をお手本にした近代日本の医療は、お手本の歴史的過程を擱いて、分化した技術的側面を採り入れた。人間を人間性の面でもとらえることを習わなかったのではなかろうか。

日本の指導者の道徳教育の第一のテキストであった孟子という本がある。私の大学子科でも教科書だった。最近、用があって拾い読み解説で指摘されて感じたことは、孟子については病とか老とか死の問題は何処にも載っていないということであった。孟子は性善説をとったのではあるが、人間の痛みの問題については積極的でなかったらしい。私はここに近代日本を拓いたエリート教育の性格が象徴されていると思う。矛盾した両面を持つ人間性に目をつぶった秀才だけが入用だったのである。

頻発する同類の社会的事件は恐らくその国の時代風潮のあらわれで、個々人はそのひと胸を演ずるに過ぎないのであろう。医者ばかりでなく裁判官も、政治家さえも不信の世のなかに右往左往している。

日本母性保護医協会は会員医師の自主規制のため特別委員会を設ける由である。人の生死に関わって医師が医学的決断を下すには4つの行動基準があるとイギリスのWebb-Peploeという人が書いている。法律、専門知識、時代理念および宗教だという。日本では果して何人が自他の信仰に根拠をおくであろうか。分析的な学問を生んだ西欧の倫理的宗教風土とはことなる日本である。外国のaudit制をそのまま持つてくることはむずかしいであろう。私たちは私たちの方式を摸索し、人間のために在る医療を育て、信ずべからざるもの信じて徒に不信を積みあげることをないように、心してゆきたい。

(泌尿器科学講座 教授)

昭和55年度通学方法・居住状況調査結果一覧

昭和55年度通学方法・居住状況調査結果をまとめましたので掲載します。

(学 生 課)

アンケート提出率

昭和55年6月1日現在

学 年	1	2	3	4	5	6	小計	大 学 院			計
	1	2	小計	1	2	小計					
在籍学生数	129(8)	122(8)	106(6)	109(12)	97(4)	97(7)	660(55)	20(1)	10(0)	30(1)	690(56)
アンケート提出数	126(7)	98(8)	83(14)	78(5)	74(2)	47(6)	506(42)	18(1)	5(0)	23(1)	529(43)
提出率(%)	97.7	80.3	78.3	71.6	76.3	48.5	76.7	90.0	50.0	76.7	76.7

通学方法のまとめ

学 年	1	2	3	4	5	6	小計	大 学 院			計
	1	2	小計	1	2	小計					
徒 歩	60(5)	16(4)	21(7)	19(1)	13	9(3)	138(20)	4		4	142(20)
							(26.3%)				(25.6%)
自 転 車	26	25(1)	25(1)	9	15	5	105(12)	1	1	2	107(12)
							(39.9)			(8.3)	(39.4)
バ ス	37(2)	24(2)	10(3)	8(1)	10(1)	8(1)	97(10)	2		2	99(10)
							(18.4)			(8.3)	(18.0)
バ 任 意 加 入				1	2	1	4				4
							(0.7)				(0.7)
ク 非 加 入		1	3	2	1		7				7
							(1.3)				(1.3)
自 任 意 加 入	4	20(1)	19(1)	32(1)	30(1)	25(1)	130(5)	10	4	14	144(5)
							(24.7)			(8.4)	(26.2)
動 車 非 加 入				1			1				1
							(0.2)				(0.2)
自 動 車 相 乗	1	15(1)	10(2)	8(2)	5	6(2)	45(7)	2(1)		2(1)	47(8)
							(8.5)			(8.3)	(8.6)
計	128(7)	101(9)	88(14)	80(5)	76(2)	54(7)	527(44)	19(1)	5	24(1)	551(45)
							(100.0)			(100.0)	(100.0)

[] は百分率

居住状況のまとめ

居住状況	学年	1	2	3	4	5	6	小計	大 学 院			計	備 考
	1	2	小計	1	2	小計							
自 宅		21(2)	14(1)	11(2)	11(1)	5	1	63(6)	1	1	2	65(6)	
親戚又は知人宅		3	2(1)			1		6(1)				6(1)	
下 宿	-32,500						1	1					
	-35,000	1	2				4	7					14
	-37,500			1			1						
	37,501-	2	1			2	5						
一 光	-32,500	1	1	4	1	2	2	11					
	-35,000	6	4	3	2	9	2	26	1		1		213(10)
	-37,500	21	18	12(5)	8	10	1	70(5)					
	37,501-	38(4)	22(1)	22	13	6	3	104(5)	1		1		
水 料	-32,500												
	-35,000	2	1	1			4						11
	-37,500					2	2						
込 み	37,501-	1	2		2		5						
	-32,500								1		1		
	-35,000					1	1						4
	-37,500												
37,501-	1			1		2							

居住状況	学年	1	2	3	4	5	6	小計	大 学 院			計	備 考
	1	2	小計	1	2	小計							
間 借	-15,000	1	4	1	3	3	1(1)	13(1)					
	-20,000		1		1	1	3	6					26(1)
	-25,000		2	1	1	1		5					
	25,001-			1		1		2					
ア	-15,000	1	2	1	1	6	1	12	1(1)	1	2(1)		
	-20,000	4	1	2	5(1)	8(1)	1(1)	21(3)	1		1		92(10)
	-25,000	5	3(2)	5(2)	10(1)		3(1)	26(6)					
	25,001-	11(1)	4(2)	4(2)	4(1)	2	1	26(6)	3	1	4		
バ	-15,000	1		1(1)		1	1	4(1)			1	1	
	-20,000	2	3	4(1)	3	3(1)	2	14(2)					39(5)
	-25,000	1	2	1	3			7					
ト	25,001-	2	3	4(1)	1			2(1)	12(2)	1		1	
	-15,000												
	-20,000				1		2	3	1		1		27(4)
	-25,000		1		1			2					
25,001-	1	3(1)		5(1)		6(2)	15(4)	5	1	6		0	
借	-6 畳												
	-20,000					1	1						
	-25,000												1
	-30,000												
30,001-													
家	-20,000		2	1	2		5						
	-25,000					2	1	3					8
	-30,000												
	30,001-												
道 営・市 営 住 宅	-20,000	2	1	1	3	1	8						
	-25,000	1				2	3						15
	-30,000						3	3					
	30,001-	1						1					

() は女子内数



研究室紹介

■ 内科学第三講座 ■ 高杉 佑一
並木教授を中心とする第3内科の誕生は51年4月で、現在は教授以下24名が教育・診療・研究に常時励んでいるほか、28名の研究生が研究に、また消化器内視鏡検査、症例検討会、抄読会、グループ毎の勉強会などに熱心に参加しています。さらに特徴的なのは、三並会といういわば第3内科の外郭団体と教室が密接な関係を保っていることです。この三並会は旭川医大第3内科の研究に関心を持ち、研修を希望する内科医で構成されていますが、年々希望者が増え現在100名を越えています。三並会会員と教室員の集りは月1回の定期的な症例検討会のほかいろいろありますが、おたがいに勉強になっています。このようなことも反映して第3内科を受診する患者が非常に多く、貴重な症例に遭遇する機会にも恵まれ、学生教育、卒後研修、専門医としてのレベルアップといった面でのメリットもあり、症例に教えられた興味深いテーマも次々に育ちつつあります。

研究面では5つの研究グループが独自の仕事を進める一方、たがいに助け合いを取りあい、大きな仕事の展開をめざす方針がとられています。研究テーマは、ストレス潰瘍、急性胃病変、虚血性胃腸病変、レーザー内視鏡による消化管疾患の治療（消化管グループ：水島、岡村、原田ほか）、新しい腹腔鏡診断技術の開発、肝炎の進展、アルコール性肝障害、脂肪肝（肝グループ：関谷、矢崎、高橋ほか）、膵疾患の早期発見をめざした研究、実験膵癌（皮下継移植に成功）を用いた膵癌治療の研究（膵グループ：上田、峯本ほか）、糖尿病・動脈硬化・高脂血症における脂質代謝、糖尿病の新しい治療指標の追求（代謝グループ：高杉、武藤ほか）、ストレスの生体に及ぼす影響、irritable bowel syndromeの実験的研究、プライマリーケアにおける心身医学的アプローチ（心身症グループ：梶ほか）などのほか、寄生虫（矢崎ほか）、消化吸收、ストレスと肝、消化器疾患における糖・脂質代謝とホルモンとの関連、糖尿病の胃病変、タバコ病、老人病に関するいろいろな研究など、グループ間の共同研究も盛んです。学会発表も国際学会、国内学会を含め年間60演題をくだらず、皆若手ながらシンポジウムや国際学会などで大いに活躍しています。したがって国内、国外との交流も多く、研究の見学にくる人があつたない現状です。今年の6月ハンブルグで開催された国際消化器病学会において、「ストレス潰瘍」の研究とその発生のメカニズムに関する科学映画で、並木教授が「パブロフ賞」を受賞しました。その研究は現在世界各国の注目を集めています。

忙しい時ほど息抜きの楽しさは格別というわけか、今年は何年よりも早朝野球の試合数も多く、各種のレクリエーションの企画も盛んでした。各自が個性・特性を発揮しながら、大きな流れのなかで充実した毎日を送っています。（内科学第三講座 助教授）

新任教官紹介

昭和55年10月1日付けで英語の外国人教師としてA.T. グレンヴィル教官が就任されました。

グレンヴィル教官は1972年12月イギリスのリプトン高校を卒業後、ケンブリッジ大学聖ジョーンズ校へ進まれ、1980年6月バース大学大学院教職専門課程1学年を修了し、本学外国人教師として赴任されました。

グレンヴィル教官から御挨拶をいただきましたので御紹介します。（広報誌編集小委員会）

Japan and I.

A.T. Grenville

Last summer, I often found myself thinking, "I wonder! what living in Japan will be like?" I imagined all kinds of initial difficulties and steeled

myself to cope with them. After two months in Asahikawa, however, I realised that all this limbering up of my psychological resilience was quite unnecessary. The kindness, friendliness and helpfulness of everybody that I have met, has made my move to Japan about as stressful as a hot bath.

It is a little difficult for me to articulate the "aims" of my stay in Japan. I am not the sort of person who views life in terms of lists of objectives of the sort:

1. Must learn 500 kanji by June 1981.
2. Must understand the Japanese character by September 1981 etc.

I have no sympathy for this approach. Of course, there are areas in which I am particularly interested (I must stress that I mean areas of Japanese society, rather than any notorious areas of central Asahikawa!), but I believe that if I am really going to learn anything about Japan, the lessons (and the rewards) are to be found in day-to-day living, rather than specialist study.

To talk a little about my teaching role, my students may be relieved to know that, in psycholinguistic theory, I lean towards the structuralists rather than the behaviourists. I believe that the basic skill, and the hardest part, in learning a language, is understanding the grammatical rules. Once that is achieved, listening and speaking skills can be developed quite quickly, with lots of enthusiasm and practice. Japanese students are, therefore, well-placed to become competent. I hope that the enthusiasm of my students does not wane as my novelty wears off! (外国人教師)

英会話学習教材の訪問販売に御注意!

最近、訪問販売による英会話学習教材の購入契約に関する苦情や相談が、道内の各消費者窓口などに寄せられており、相談者の中には学生も多く含まれています。

これらの苦情や相談は、「内容が高度すぎて使いこなせない」「購入価格が高額なため支払いが不可能になった」などにより返品したいというものが大半で、軽率に契約したものが多く見られます。

ついては、学生諸君も被害にあわないよう下記事項に十分留意して下さい。

記

1. 勧誘されたときは、まず、販売員に対し身分証明書の提示を求め、会社名、販売員名、販売の商品の種類を確認すること。
2. 購入に際しては、必ず現品の提示を求め、内容を確認し、本当に必要かどうか冷静に判断し、必要なときは、きりと断ること。
3. 購入価格が極めて高額であり、その支払いについては自己の資力を十分考えること。
4. 契約書・申込書の記載事項をよく読み、十分理解してから契約を行うこと。
5. 購入契約書を締結した日以降4日以内で、かつ分割払の場合は、割賦販売法及び訪問販売等に関する法律により、無条件で契約を解約することができるので、その必要性が生じたときは、書面を作成し最寄りの集配郵便局で内容証明を受け、相手方にその旨を速やかに通知すること。
6. この種訪問販売に際しては、学友会名簿等が利用されていることが多いので、取扱いについても十分配慮すること。
7. 苦情や相談を必要とするときは、次の窓口で速やかに申し出ること。

旭川市消費生活センター

旭川市5条10丁目 電話 22-8228 (学生課)

スポーツ大会

9月10日(水)、ソフトボール・バレーボールの2種目に、学生・教職員のべ400名が参加し、スポーツ大会が行われました。例年天候に恵まれている本大会は今年も好天の中で実施され、各チームとも優勝をめざして健闘しました。結果は次のとおり。ソフトボール 1位サッカー部2年目チーム 2位硬式庭球部 バレーボール 1位3年B組 2位元幸メッツ (学生課)

弓道部・卓球部主管終える

本学が主管となり下記のとおり2つの大会が開催されましたので御紹介します。

第5回全道学生弓道女子戦 10月18日・19日、本学体育館を会場に11大学54名の参加により開催された。本学の試合成績は団体戦7位と奮わなかったが、大会副会長に山田学長、大会委員長に石田明美さん、その他本学弓道部員が大会役員として大会を準備・運営し、仮設の弓道場を設営するなど苦労も多い中、無事主管を終えた。

第9回北日本医科歯科学生卓球大会 11月2日(日)・3日(月)、旭川市立体育館常盤分館を会場に8大学のべ340名の参加により開催された。大会会長の岩淵教官、大会実行委員長の門正則君を始め卓球部員は、主管に当たり大会をスムーズに運営し盛り上げた。(成績 男子団体4位、ダブルス高桑・田代3位、女子団体4位、シングルス野原3位、溝口3位)

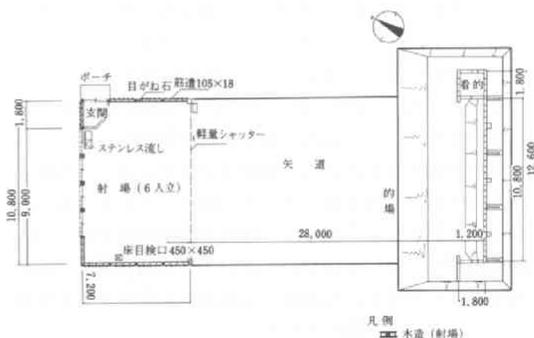
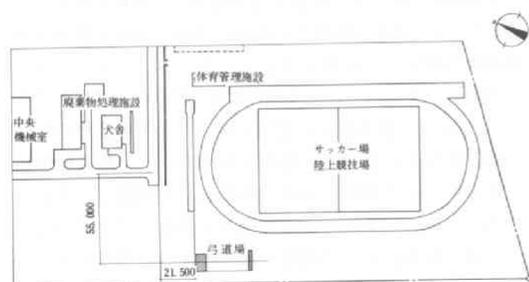
弓道部・卓球部及び関係者の方々、どうもご苦労さまでした。

(学生課)

弓道場の建設について

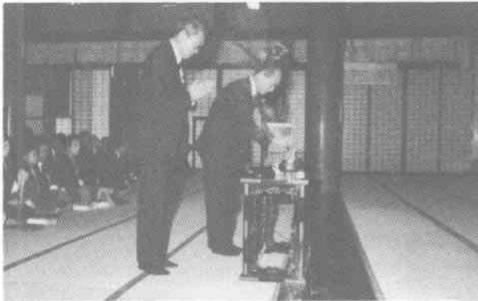
数年来の念願であった弓道場が、課外活動施設充実の一環として、昨年11月6日に陸上競技場西側に着工され、現在建設が進められています。今まで弓道場がないため十分な活動ができなかった弓道部も、この弓道場が完成することによって、より充実した活動、各大会での活躍等効果的な利用が期待されます。

建設中の弓道場のあらまきは次のとおりです。 1. 工事期間 昭和55年11月6日～昭和56年3月16日 2. 建物面積 射場 木造平屋建 77.76㎡ 的場 コンクリートブロック造平屋建 22.68㎡ (学生課)



解剖体追悼法要

9月24日(水)午後1時30分から、東本願寺旭川別院において、昭和55年度解剖体追悼法要が執り行われました。本年度の法要は、昭和54年9月1日以降昭和55年8月31日までの間に御遺体を提供され、医学教育の礎となられた159体(系統解剖27体、病理解剖86体、法医解剖46体)を対象として精霊が供養されました。学長焼香及び追悼の辞のあと、読経の流れの中、御遺族・来賓・本学教職員及び学生代表が次々と焼香し、故人の遺徳を偲び冥福を祈念しました。(学生課)



課外活動短信

- ラグビー部 男～3 第23回東医体冬季大会 2回戦敗退
(1回戦 旭医大82-0 帝京大 2回戦 旭医大8-20 群大)
- ゴルフ部 男 第4回男子定例会 村上達哉優勝・紀野修一 10位 女 全道学生マッチプレー選手権 紀野修一準々決勝進出 村上達哉 1回戦敗退
- サッカー部 3校対抗戦 優勝 第29回全日本大学サッカー選手権道予戦Aグループ3位
- 剣道部 女 新人戦 2回戦敗退
- 弓道部 女 争覇戦 4部2位
- 写真部 女 16服部健司写真個展「20才の夏は去った一大器 晩成型天才写真少年展」於学生ロビー、男 27 第6回旭川写真連盟展 服部健司全紙パネル3枚組出展
- 棧敷文の会 女 第30回例会 ヘルマンヘッセ「知と愛」(提起 伊東・浜口) 女 座談会「表現ということ」(伊東・加藤(ふ)・中村・服部) 女 第31回例会 ラーゲルクヴィスト「バラバ」(提起 安藤(一病))
- Jazz研究会 男 スキー部主催ダンスパーティー バンド出演 (学生課)



窓外

笹森秀雄

「トネッコ会」のここと一滅びゆくもの、生れるもの一過日、「医療生活環境調査」ということで、15年ぶりに帯広市の一農村S部落を訪問する機会をもった。このS部落は、合併前「川西村」に所属していたところで、帯広駅から西方に約20キロ、十勝バスで40分ほどいったところにある戸数25戸の畑作酪農村である。

私がこの部落を最初に訪問したのは昭和40年1月で、農業構造改善事業に関する基礎調査のためであった。この調査はまる3カ月を要したので、この間部落の方々とも親しくなった。しかし15年の歳月は、当時の記憶をよみがえすには大変であった。幸い手元に「調査報告書」があったのでそれを一読し、記憶を新たにしてこの部落を訪問した。

まず最初に、この部落で最大の血縁集団といわれる「Wマキ」の総本家を訪れた。世帯主はすでに亡く、当時26才だった長男が後を継いでいた。私のこともよく知っており、大変うれしく思った。目的の医療調査が終了した後、部落の様子について話を伺ったが、この15年間に、世代の交替はもちろん、生活面・生産面でも随分と大きな変化のあったことを聞かされた。

以前訪問した時に聞いた「トネッコ会」のことをふと思い出し、その話をしたところ、「それはとうになくなり、いまはそれにかわって牛魂祭という祭りがある」ということであった。

S部落では、昭和20年頃、まだ隣りのK部落と一緒にあった頃、馬を所有している農家(もちろん全戸)が集まって「愛馬会」をつくった。これは、馬が生れた場合や死んだ場合に、各戸がお金を出し合って、秋祭りの日に、馬を主役に仕立ててお祝いや供養をするというものであった。この地方では仔馬のことを「トネッコ」というが、仔馬が生れた場合、1頭につき300円を據出し、その金で婦人達を1日遊ばしていた。これを「トネッコ会」と呼んでいた。現在は農業構造の変化、とくに機械化の進展によって馬の役割が殆んどなくなり、したがってまた仔馬も皆無となり、「トネッコ会」も自然消滅したという。そしてこれに対応して、「馬頭歎世音」祭りの意義もまた、最近では失われつつあるという。

S部落は、古くから有数な豆作地帯といわれていたところであるが、最近では酪農化の方向に進み、殆んど各戸が10頭前後の搾乳牛を飼育するようになった。「トネッコ会」が消滅し、それにかわって「牛魂祭」が新たに登場してきたというのも、農業経営の変化を考えると至極当然である。

農村社会はいま大きな変貌を遂げている。長い間生活と密着していた集団や制度が跡形もなく消滅し、それにかわって新しい集団や制度が続々と生成してきている。「トネッコ会」や「牛魂祭」はその1つの例にすぎない。それにしても、今後どのように変化していくのか、興味深いものがある。(社会学 教授)